

「研究論文」

「告白」が示す希望のきざし

——芥川龍之介『河童』における可能性

坂本 明日香

一 はじめに

芥川龍之介といえ、近代文学を代表する作家の一人である。中でも「河童」(一)は、芥川文学の一つの到達点として受け取ってよいだろう。

論としては、「河童」を芥川の心境が表れている小説として捉え、全体に憂鬱や絶望を読み取るものが多い。足立直子氏のように、「『河童』は絶望の書か？」という問いを掲げ肯定的に捉えようとしている論(二)もあるが、その方面での研究はまだ発展の途上にあるといえるだろう。確かに初読時は、「河童」における「絶望」の印象が強く残る感は否めない。特に有名な(四)の出生の場面には、「生まれて来なければよかった」という思いが込められているように見える。また、芥川自身が

吉田泰司に宛てた書簡に「河童はあらゆるものに対する、——就中僕自身に対するデグウから生まれました。」(3)と綴られていることよって、「河童」は絶望の書に見えてしまうこともある。

しかし、本当にそれだけだったのか。希望を見出す読み方は他にもできないのだろうか。本稿は、このような考えに基づいて「河童」を考察してゆくことを目的とした。

二 「河童」における問題の所在

「河童」は、「或精神病院の患者」である「僕」が、河童の国へ行きさまざまなことを経験する話である。

芥川自身のことを述べていると思われる箇所としては、(四)の出生と遺伝の問題が述べられている部分や、(五)や(十)の家族制度の問題、(六)の恋愛の問題を取り上げている部分などが挙げられる。

特に(四)の次の場面は、芥川の人生においても大きな意味を持つ、(母)の問題と重なる部分である。以下は本文の引用である。

けれどもお産をするとなると、父親は電話でもか

けるやうに母親の生殖器に口をつけ、「お前はこの世界へ生れて来るかどうか、よく考へた上で返事をしろ。」と大きな声で尋ねるのです。バツグもやはり膝をつきながら、何度も繰り返してかう言ひました。

それからテエブルの上にあつた消毒用の水薬で嗽ひをしました。すると細君の腹の中の子は多少気兼ねもしてゐると見え、かう小声に返事をしました。

「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じてゐますから。」

バツグはこの返事を聞いた時、てれたやうに頭を掻いてゐました。

芥川の自伝的事実からいえば、「精神病」のあつたのは「お母さん」である。そのためこの場面は、「お母さん」といふべきところを作品上「お父さん」にしておき、その上で發狂の遺伝への恐怖を述べていると推察するのが一般的である。確かに「僕は生れたくはありません。」という台詞だけ見れば、「自分は生まれて来たくなかつた」という、芥川自身の不満や文句にも似た恐怖を反映しているように見える。

そして芥川は、母の發狂の遺伝を恐れる一方で、自分

の子供にもそれが遺伝してゆくことを恐れた。芥川の遺稿である「或阿呆の一生」の、(二十四 出産)に、次のような台詞がある。

「なんのためにこいつも生れて来たのだろう？この娑婆苦の充ち満ちた世界へ。——なんのためにまたこいつも己のようなものを父にする運命をになつたのだろう？」

生まれて来た長男を見た時の主人公「彼」の台詞である。「己のようなものを父に……」からは、「己のようなもの」の血を受け継いで生まれて来ることへの同情や、そうさせてしまつた罪悪感が見受けられる。

そうであるならば、芥川は、せめてもの自己療養のためにこの部分を書いたと推察される。人間の世界では、子供自身が選んで生まれて来ることはできないが、河童の世界では、子供自身が生まれて来るかどうかを選ぶことができる。そこに芥川自身の願望が込められている、と読むことも可能だろう。

しかし、単に「生まれて来ることを選べないことの悲劇」を示したかつたのであれば、河童が自分で選んで生まれて来る、ということだけを描けばよかつたはずであ

る。けれども作中には、自殺してしまふ河童の姿も描かれていて、この場面にはその他の意味も含まれていてと考えられる。

そこで次節では、「母」という問題が取り扱われている私小説(またはそれに準ずるもの)である、「少年」(4)「大導師信輔の半生」(5)「点鬼簿」(6)の三作品について、発表順に考察していく。その中で「母」が私小説ではどのように描かれているのかを確認し、その上で「河童」について考察することとした。

三 私小説における芥川の告白

三・一 少年

芥川中期に書かれた「保吉物」の主人公保吉は、芥川自身と重なる部分の多い人物に設定されている。そのことから、「保吉物」は芥川における「私小説」の皮切りとなった作品であるといえる。けれども「保吉物」には、表面的な自己ばかりが描かれており、自己の内面に迫るものではなかったため、形式的には「私小説」であつても、内容は「私小説」とは言い難いものであつた。

しかし「保吉物」の中の「少年」だけは、(現在の)保吉が過去を回想するという形になつてゐることにより、

表面的な自己だけではなく、自己の内面に迫ろうとしている姿が窺える。そのため、「少年」だけは、名実ともに「私小説」に近いといえるものだったといえよう。

「少年」の章の中でも(六 お母さん)は、芥川が今まで避け続けてきた「母」のことに触れられている部分であるため、特に重要だと考えられる。舞台は保吉が八歳か九歳の秋、回向院の境内で、友達と戦争ごっこをしている保吉は、転んで怪我をし、痛みのあまり泣いてしまふ。以下はその時と、その後大人になつてから入院をした時の二つの場面である。

すると突然耳もとに嘲笑の声を挙げたのは陸軍
大将の川島である。

「やあ、お母さんつて泣いてゐやがる！」

川島の言葉は忽ちのうちに敵味方の言葉を笑ひ声
に変じた。殊に大声に笑ひ出したのは地雷火になり
損つた小栗である。

「可笑しいな。お母さんて泣いてゐやがる！」

けれども保吉は泣いたにもせよ、「お母さん」など
と云つた覚えはない。

保吉は爾来この「お母さん」を全然川島の発明し

た嘘とばかり信じてゐた。処が丁度三年以前、上海へ上陸すると同時に、東京から持ち越したインフルエンザの為に或病院へはひることになった。熱は病院へはひつた後も容易に彼を離れなかつた。彼は白い寝台の上に朦朧とした目を開いたまま、蒙古の春を運んで来る黄沙の凄じさを眺めたりしてゐた。すると或蒸暑い午後、小説を読んでゐた看護婦は突然椅子を離れると、寝台の側へ歩み寄りながら、不思議さうに彼の顔を覗きこんだ。

「あら、お目覚になつていらつしやるんですか？」

「どうして？」

「だつて今お母さんつて仰有つたぢやありませんか？」

この二つの場面において、保吉は自分が「お母さん」と言つたことを自覚していない。他の人から言われて初めて、「お母さん」と口走つたことは事実のようである、ということを確認している。

この「少年」が書かれた当時、芥川はまだ実母の発狂を公表しておらず、随筆等に書かれるものも含めて、「母」といえば実母ではなく養母であつた。「少年」の他の章にも母が登場するが、そこで描かれているのも、実母では

なく、養母のことであろう。では、(六)に書かれた「母」は何者か。

芥川が意識的に「母」と呼べるのは、養母だけであつた。実母のことは、呼びたくても呼ぶことはできなかった。しかし、芥川の心の中には、実母は忘れたくとも忘れられない存在としていつもあつたはずである。だからこそ、無意識のうちに呼んでいた「母」、弱っている自分が無意識のうちに求めてしまう「母」は、明確に示されている訳ではないとはいえ、実母のことであつたと推察される。芥川は、これまで描くことのできなかつた「母」について、「無意識」という形を借りて、描くことができただのである。

三・二 大導寺信輔の半生、そして点鬼簿へ

「大導寺信輔の半生」の主人公「大導寺信輔」も、芥川龍之介自身を髣髴とさせる人物となつてゐる。(二)牛乳)には、次のような場面がある。

信輔は全然母の乳を吸つたことのない少年だつた。元來体の弱かつた母は一粒種の彼を産んだ後さへ、一滴の乳も与へなかつた。のみならず乳母を養ふことも貧しい彼の家の生計には出来ない相談の一つだ。

つた。彼はその為に生まれ落ちた時から牛乳を飲んで育つて来た。それは当時の信輔には憎まざりにはゐられぬ運命だつた。彼は毎朝台所へ来る牛乳の壺を輕蔑した。又何を知らぬにもせよ、母の乳だけは知つてゐる彼の友だちを羨望した。

この場面からは、「母」という存在にこだわり続ける信輔、ないし芥川の姿が窺える。「少年」では、「母」は無意識にしか求められないものであつたが、芥川はこの場面で初めて、自分が「母」を求めているということを示すことができるのである。

しかし、それはあくまで「自分の母」ではなく、「母的なもの」でしかなかつた。「大導師信輔の半生」では、「僕」が母の乳を知らぬまま育つたことの理由として「元來体の弱かつた母」が挙げられているが、これは芥川の実体験とは異なる。芥川の実体験に即せば、ここは「実母が発狂していたから」母の乳を知らぬまま育つた、と書かれるべきであつただろう。しかし芥川はそうせず、「元來体の弱かつた母」という書き方することによつて、事実をごまかしたのである。片山晴夫氏は、次のように述べている。

芥川は、自らの「母」という問題にたやすく接することのできぬ人間であつた。なぜなら、それは彼の禁忌の問題だつたからである。従つて、彼は、自らの作品の中で「母」という文字を認める時、ある種のこだわりを覚える人間であつたはずである。そのこともあつてか、この一節の「母」には、実母とも読め、また養母とも解することのできる工夫と配慮が施されている。(7)

「実母」を求める自分を書くには、どうしても実母の発狂の事実も書かざるを得ない。実母の発狂の事実を隠している限り、「実母」を求める自分は描けないのである。かといつて、作品に書いて発表することは、この時の芥川にはまだできなかつた。「実母について告白する」ということは、「実母の発狂と言う事実を受け入れた自分」を書くといふことに他ならない。その覚悟が、芥川にはまだなかつたのだろう。

それでも、「母」を求める想いを書かずにはいられない芥川の現状があつた。そこで、実母とも、養母ともとれるような「虚構」を混ぜて「母」は描かれた。「実母」の発狂の事実を隠したまま「母」を描くには、それしかなかつたのである。

その後書かれる「点鬼簿」では、「僕の母は狂人だつた。」という一文で始まっている通り、いよいよ母の発狂が告白される。芥川はそれによつて、「母的なもの」に対する思いではなく、「実母」への思いを描くことが可能になった。

「点鬼簿」は四章構成で、それぞれ母・姉・父・僕について語られているが、母の章である（一）には、次のような場面がある。

僕の母は二階の真下の八畳の座敷に横たはつてゐた。僕は四つ違いの僕の姉と僕の母の母の枕もとに坐り、二人とも絶えず声を立てて泣いた。殊に誰か僕の後ろで「御臨終々々々」と言つた時には一層切なさのこみ上げるのを感じた。しかし今まで瞑目していた、死人にひとしい僕の母は突然目をあいて何か言つた。僕等は皆悲しい中にも小声でくすくす笑ひ出した。

僕はその次の晩も僕の母の枕もとに夜明近くまで坐つていた。が、なぜかゆうべのやうに少しも涙は流れなかつた。僕は殆ど泣き声を絶たない僕の姉の手前を恥ぢ、一生懸命に泣く真似をしてゐた。同時に又僕の泣かれない以上、僕の母の死ぬことは必ず

ないと信じてゐた。

僕の母は三日目の晩に殆ど苦しまずに死んで行つた。死ぬ前には正気に返つたと見え、僕等の顔を眺めてはとめ度なしにぼろぼろ涙を落した。

これは、母の臨終の場面である。「僕は四つ違いの僕の姉と僕の母の母の枕もとに坐り、二人とも絶えず声を立てて泣いた。」や、「僕の泣かれない以上、僕の母の死ぬことは必ずない」という言葉からは、死にゆく母を恋う気持ちや、少しでも長く母に生き延びてほしいという切なる思いが読み取れる。また、「死ぬ前には正気に返つたと見え、僕等の顔を眺めてはとめ度なしにぼろぼろ涙を落した。」という部分は、海老井英次氏の指摘にもあるように、虚構の介入の疑いは禁じ得ないところであるが（8）、その分「母を狂気から解放してやりたい」という思いが込められているのだろう。実際に「死ぬ前に正気に返る」ということがあつたかどうかは定かではないとしても、少なくとも「そう描きたかつた」という芥川の意志は伝わる。ここからは、母への深い愛が感じられる。

また、「母」の章は（一）だけであるが、他の章にも「母」のことが描かれている。（三）の次の場面は、父との思い出を語る中で、「母」への思いが綴られているとい

う場面である。

僕が病院へ帰つて来ると、僕の父は僕を待ち兼ねてゐた。のみならず二枚折の屏風の外に悉く余人を引き下らせ、僕の手を握つたり撫でたりしながら、僕の知らない昔のことを、——僕の母と結婚した当時のことを話し出した。それは僕の母と二人で筆筒を買ひに出かけたとか、鮪をとつて食つたとか云ふ、瑣末な話に過ぎなかつた。しかし僕はその話のうちについていつか暈が熱くなつてゐた。

石谷春樹氏も指摘しているが(9)、ここで描かれる「母」は「結婚した当時」の母であり、「僕の知らない」母、つまり、「発狂する前」の母であることに注目したい。「僕の知っている母」は、必ず「発狂している母」であるから、芥川が「母」を思う時、どうしても「発狂の遺伝の恐怖」が付きまとう。けれど、芥川はここで「僕の知らない母」を描いたことによつて、「発狂の遺伝の恐怖」を考へることなく、母を思うことができたのである。

私小説では、どれほど「母」を求めても、どれだけ「母」への愛があつても、母からの助けが返つて来る訳ではない。自分の心情を描くために虚構を介入させることはで

きるが、「母」の反応に自分の願望をのせてしまえば、それは「私小説」ではなくなるからだ。そのため、思いは、芥川からの一方通行になつてしまふ。しかし、その心境を吐露することによつて、芥川は自分の中に母を発見することができたのだと推察される。「点鬼簿」の冒頭には、「僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。」と書かれている。そのように「母らしい親しみ」を感じたことのなかつた母を、「点鬼簿」という作品のさまざまな場所で思い出していくことによつて再発見し、そうすることで、生前感じることのなかつた「母らしい親しみ」を、そこに感じたのではないだろうか。

実際に母が助けてくれる訳ではなくても、それが、この時点での救いになつたのだ。

四 「河童」が示す可能性

四・一 芥川と母

以上の考察をふまえ、二節において問題提起した、「河童」(四)の出産の場面を再考する。

これまでの研究では、この場面は「第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大へんです。」という台詞に焦点をしばり、「芥川が実母の発狂の遺伝を恐れるあまりの発

言だ」と論じられることが多かった。しかしこの場面には、他にも考察すべき観点がある。それは、ここが、父であるバツグと胎児の「対話の場面」だということである。この場面を「精神病の遺伝のある親との対話」という観点から見ると、芥川自身の、「実母との対話」の置き換えと捉えることが可能になるのではないだろうか。

「細君の腹の子は多少気兼ねでもしてゐると見え、かう小声に返事をしました。」という表現があるように、胎児は、「生れたくはありません」ということを、「きっぱりと」告げた訳ではない。「多少気兼ね」をしながら、しかも「小声」で言ったのである。もしこの台詞に、「自分の生をその始源に遡って否定したい」という強い否定や非難の気持ちがあったのならば、このような表現にはならなかっただろう。そうすると、「多少気兼ね」をしながら「小声」で、という表現には、「母にこのようなことを言うのは申し訳ない」という配慮が含まれていたということになる。

しかし、「申し訳ない」と思うのであれば、そもそも言わないという選択肢もある中で、それでも言った姿を描いたということは、どういう意味をもつか。

芥川は、幼いうちに養家に引き取られ、ずっと養父母達に引け目を感じながら生きて来た。それは養父母達へ

遠慮する気持ちと、「本当の子でない自分の我儘を受け入れてもらえるかどうか」という不安や躊躇いがあったからであろう。実際、唯一自分の意見を主張した「初彦」の事件においても、芥川の思いは尊重してもらえなかった。特に、最も信頼した育ての母である伯母にその思いを聞き届けてもらえなかったことから、芥川は「やはり本当の母でなければ我儘は言えない」という思いを強めた。それと同時に「本当の母であれば、聞き届けてくれたのではないか」という「実母」への憧れも抱いたのではないだろうか。

そのような経緯をふまえると、この胎児とバツグのやり取りには、芥川の「自分の思いを受け止めてくれるであろう母」を求める思いが込められていると推察される。芥川はこの場面で「親の否定」や「遺伝の否定」を書き加えたのではなく、ただ不安を打ち明けたかったのだと言うこと、そしてその不安を打ち明けることを、他ならぬ母に許してもらおうとしたのだろう。

「点鬼簿」に書かれていたように、発狂した母とは対話は不可能であった。これがフィクションだったからこそ、「実母との対話」は実現したのである。「私小説」には虚構が混ざることもあるとはいえ、どうしても曲げられない事実もある。だから「私小説」では、どんなに母

を求めても、「芥川からの一方的な思い」しか描くことはできず、そこに「私小説」の限界があった。しかし、「河童」では、「芥川の思い」は「母」に通じた。

「実母との対話」といつても、その場面を書いたのはあくまで芥川である。「僕は生れたくはありません。」と
言われて「てれたやうに頭を搔くバツグの姿、つまり、
「芥川の不安を受けとめる母」の姿も、芥川の願望の表
れなのだ。それは、「私小説」では描けないことだった。

恐らく芥川は、「母との対話」を描くためにこの部分
を描いた訳ではない。この部分を描いたから、「母との対
話」が可能になったのだらう。「私小説」では、「母」と
の対話を「書こう」と思うからこそ、「どうしても書けな
い限界」に突き当たる。逆に、「私小説」という枠を取り
払うことで、描けるようになったのだ。その意味では、
このフィクションという手法は、芥川の心情を描くのに
有効なものであったと言える。

四・二 「河童」における語り

ここで、語りの問題について考察する。酒井英行氏は、
「狂人」の「僕」が「狂人」と設定されることによって、
「本来あり得ない話」として受け取られるべき「河童の
国」の話が、「彼にとつての真実」という意味で、逆にリ

アリテイをもつということ述べている(10)。

しかし、河童の世界と人間の世界を行き来している
「僕」は、あくまで狂人である。狂人の「僕」が語る世
界は、河童の世界にせよ、人間の世界にせよ、どちらも
あくまで「虚構」なのだ。だから、「僕」が河童の世界か
ら出て行こうが、人間の世界から河童の世界に帰ろうが、
「僕」は結局「同じ世界」を行き来しているに過ぎない。

河童の国にすることが憂鬱になったから、「僕」は人間の
世界に帰ることを決めたのに、次は人間の世界が嫌にな
ったから、河童の世界に帰ろうとしている。それでは、
いつまで経っても、「僕」は憂鬱から抜け出せない。今度
は、もし「河童の国」に帰っても、また憂鬱になって「人
間の世界」に帰って来るだけである。

では、「僕」が憂鬱から抜け出すためには、どうすればよ
かったのか。「河童の国」で憂鬱を感じた「僕」は、それ
から抜け出す場所として「人間の世界」を思い浮かべ、
「人間の世界」で憂鬱を感じた時は、「河童の国」を思い
浮かべた。そしてそれは結局上手いかず、「僕」は「精
神病患者」として憂鬱の中に留まる結果となつてしまつ
た。しかし、もしここで、「人間の世界に帰る」「河童の
国に帰る」というだけではなく、違う選択肢を思い浮か
べることができていたら、「僕」はこの円環から抜け出す

ことができていたのではないか。「人間の世界が嫌になつたから、河童の国へ帰ろう」という思考ではなく、そこに「第三の世界」があれば、この虚構の世界から抜け出す、つまり憂鬱から抜け出す可能性があつたかも知れないのである。

この場面については、足立直子氏は「僕が河童の世界を（信じる者）であつたからこそその結末は、換言すれば（信）の延長線上にこそ、人間の閉塞感や絶望感を乗り越える、存在の連帯による温かさがあることを明確に示し出している。」（11）と述べている。これは、「僕」が狂人であるかないか、つまり「河童の国」が「僕」の妄想であるかどうかということは問題ではなく、「僕」が（信じる者）である以上、その「僕」が（信じる）ことそのものが救いにつながる、という考え方である。そのように受け取ることもできるだろう。

けれどもこれは、「河童」という作品が、「河童の世界」を語る「僕」について違つて（僕）が語っている、という入れ子構造になっている以上は、救いになるとは考え難い。「僕」自身は救われた気になっているかもしれないが、それを外側から見つめる（僕）という存在がいることによって、結局は「救われた気になってしまつて」だけであるということが客観的に確認され、より浮き彫り

になってしまふのである。

ということとは、「河童」に救いを見出すとすれば、「僕」が（信じる）内容そのものよりも、そのような「僕」を外側から見つめる（僕）という位置を、芥川が設定し得たという、そのこと自体に、なのではないだろうか。「入れ子構造」である以上は、『僕』のいる狂気の世界』と『僕』を語る（僕）のいる現実の世界』という枠で考えることは無意味である。結局は『僕』のいる狂気の世界を語る（僕）のいる現実の世界を語る僕』というように、どんどんと世界が広がっていかざるを得ず、どこからが「現実」でどこからが「狂気」などということを区別することが不可能になるからだ。これでは、結局「僕」が「河童の世界」と「人間の世界」という「虚構」から「虚構」の行き来を繰り返していたのと、同じことになつてしまふ。

だからやはり重要なのは、芥川自身が「僕」を「狂人」とみなす視点を作り出しておいた、という事実そのものである。「僕」を外側から語る（僕）という存在を設定し得たことによつて、芥川は「僕」という存在の行う「虚構」から「虚構」への移行を、否定的に見つめる立場に立つことができた。これは、私小説では決してできないことだった。私小説は、「自分に起きた出来事」を作者（語

り手)が語る、という構造を持つ。これは、「河童」でいう、「僕」に起きた出来事を(僕)が語っている、という構造と重なる。つまり、私小説を書く場合、「私小説を書く」という行為を行う作者(芥川)そのものが既に、「河童」でいう「筆記者」の(僕)の立ち位置に立ってしまっているのである。

私小説では、(僕)の更に外側で語ることは不可能だった。「書こう」と思うからこそ、逆に「どうしても書けない限界」に突き当たるということを、芥川は既に経験していた。

しかし「河童」の場合であれば、作者は(僕)の更に外側に立つことができた。私小説ではなく、「フィクション」だったからこそ可能だったのである。

五 おわりに

以上のようにして芥川は、作品上、自分の問題を持ち越えることができた。そして、狂人の「僕」をこのように否定的に書ける立場にいた芥川自身、作品の上だけでなく、実際に乗り越えられる可能性があったはずである。芥川は、「河童」以降、また「フィクション」としてではなく「私小説」として自分の人生の問題の乗り越

えをしようと試みるようになってしまふ。そしてその後、自殺してしまう訳だが、「河童」のような方向性で乗り越えを試み続けたのなら、或いは作品上だけではなく本当に、乗り越えることが可能だったのではないかとさえ、思えるのである。

実際に芥川が自殺をした後となつてしまつた今では、あくまで「可能性があつた」としか言うことはできない。しかし、そのような可能性があつたからこそ、「河童」の中には、絶望的な空気に混ざつて、希望の光を感じ取ることもできるのだろう。

【注】

- (1) 一九二七年三月『改造』に発表。
- (2) 足立直子「『河童』論——(信)と(狂気)を境として」『国文学解釈と鑑賞』、第七五巻第二号、至文堂、二〇一〇年二月、所収。
- (3) 一九二七年四月三日、吉田泰司宛書簡(芥川龍之介全集)、第二〇巻、岩波書店、一九九七年八月、所収、二九一頁。
- (4) 一九二四年四月『中央公論』に発表。
- (5) 一九二五年一月『中央公論』に発表。
- (6) 一九二六年一〇月『改造』に発表。

(7) 片山晴夫「芥川龍之介の小説の方法―なぜ真実と偽りにこだわったか―」(『語学文学』、第二十九号、一九九一年一月、四二・四三頁)。

(8) 海老井英次「『点鬼簿』論考―芥川龍之介・最後の告白―」(『文学論輯』、第三十二号、一九八六年一〇月、九・一〇頁)。

(9) 石谷春樹氏の「芥川龍之介「点鬼簿」論―新たなる(告白)―」(『鈴鹿工業高等専門学校紀要』、第三十九号、二〇〇六年二月、一〇四頁)に「このように父のことを語る章でありながら、父は母との思い出を語っている。しかも、その内容は結婚当時のことであり、狂人の母の姿を語っていない。言わば「瑣末な話に過ぎな」くても「僕の知らない昔のこと」であり、換言すれば、僕が知りたい母の姿である。」という指摘がある。

(10) 酒井英行「『河童』の構造」(『芥川龍之介 作品の迷路』、有精堂、一九九三年七月、所収、二五五・二五六頁)。

(11) (2)と同じ。

本文中の芥川作品引用は、『芥川龍之介全集』(岩波書店)の第一巻、第一二巻、第一三巻、第一四巻、第一六巻に拠った。

(さかもと) あすか 宮田村立宮田小学校